今週の目標：テーマ実習に利用するデータの決定、「理解度」「共感度」の定義検討

2021/6/20

学籍番号：2J19F508-7

氏名：川崎咲希

自動車販売員対話コーパスの音声を聴収した。男性客と女性販売員の対話で、はい/あー/そうですね等の相槌から、共感や感嘆、驚き、漫然、疑いといった状態を推定することができそうだと感じたため、本データを実習に使用したいと考えた。

「共感度」「理解度」について、まずどのような尺度があるか調べたところ、共感性を示す尺度として、共有経験尺度（SSE）、共有不全経験尺度（SISE）、対人反応性指標（IRI）といったものがあることがわかった。しかし、これらの心理測定尺度は対象者個人の特性を測るものであると思われた。理解度に関しては、確認テストやアンケートを利用して測定する方法があった。

上記の調査をもとに「共感している」「理解している」ことを定義するにあたり、ルーブリックのような指標を独自で作成しそれを基準として主観的な評価を行ない、ある点数以上を「共感している」「理解している」とするという案を考えた。以下に案を示す。

・共感度及び理解度の指標案

共感レベル：相手の説得に対する応答について評価する

１　相手の言葉に反応していない

２　相手の言葉に反応しているが、否定をしている

３　相手の言葉に反応し、中立的な文言を発している

４　相手の言葉に反応し、肯定的な文言を発している

５　相手の言葉に対し肯定的な文言を抑揚をつけて発している

６　相手の言葉に対し肯定的な文言を抑揚をつけて大きな声で発している

理解レベル：相手の説明に対する応答について評価する

１　相手の言葉に反応していない

２　相手の言葉に反応しているが、わからない旨の文言を発している

３　相手の言葉に反応し、中立的な文言を発している

４　相手の言葉に反応し、肯定的な文言を発している

５　相手の言葉に対し肯定的な文言を抑揚をつけて発している

６　相手の言葉に対し肯定的な文言を抑揚をつけて大きな声で発している